1 離散畳み込み (Discrete Convolution)

1.1 離散フーリエ変換 (DFT)

離散畳み込みを理解するための、第一歩として、離 散フーリエ変換を説明する。

定義 1 $b=(b_0,\ldots,b_{2M-2})\in\mathbb{C}^{2M-1}$ に対して、 $a=\mathcal{F}(b)\in\mathbb{C}^{2M-1}$ を

$$a_k = \mathcal{F}(b) := \sum_{j=0}^{2M-2} b_j e^{-2\pi i (\frac{jk}{2M-1})}, \quad |k| < M$$

とし、これを**離散フーリエ変換** (DFT) と呼ぶ。

1.2 逆離散フーリエ変換 (IDFT)

定義 2 $a=(a_k)_{|k|< M}=(a_{-M+1},\ldots,a_{M-1})\in \mathbb{C}^{2M-1}$ に対して、 $b=\mathcal{F}^{-1}(a)\in \mathbb{C}^{2M-1}$ を

$$b_j = \mathcal{F}^{-1}(a)$$

$$:= \sum_{k=-M+1}^{M-1} a_k e^{2\pi i (\frac{jk}{2M-1})} \quad j = 0, \dots, 2M-2$$

とし、逆離散フーリエ変換 (IDFT) と呼ぶ。

注意 一般的な DFT/IDFT はスケーリング係数を つけた形で定義されることが多い。この点で上の定義 は一般的な定義と違う。

1.3 離散畳み込みのアルゴリズム

 u_1,u_2 を周期 L 、変数 t に関する周期関数とし、 $\omega=\frac{2\pi}{L}$ とする。このとき、 u_1,u_2 をフーリエ級数展開すると、

$$u_1(t) = \sum_{k \in \mathbb{Z}} a_k^{(1)} e^{ik\omega t}, \quad a^{(1)} = (a_k^{(1)})_{k \in \mathbb{Z}}$$
$$u_2(t) = \sum_{k \in \mathbb{Z}} a_k^{(2)} e^{ik\omega t}, \quad a^{(2)} = (a_k^{(2)})_{k \in \mathbb{Z}}.$$

そして、これらの周期関数の積は、

$$u_1(t)u_2(t) = \sum_{k \in \mathbb{Z}} (a^{(1)} * a^{(2)})_k e^{ik\omega t}$$

と表される。ここで $(a^{(1)}*a^{(2)})_k$ を離散畳み込みといい、

$$(a^{(1)} * a^{(2)})_k = \sum_{\substack{k_1 + k_2 = k \\ k_1, k_2 \in \mathbb{Z}}} a_{k_1}^{(1)} a_{k_2}^{(2)}, \quad k \in \mathbb{Z}$$

と表される。

さらに、数値計算への応用を意識すると、 u_1, u_2 のような(有限モードのフーリエ級数で表される)周期 関数が p 個 $(p \in \mathbb{N})$ あったとき、

$$\begin{split} u_i(t) &= \sum_{|k| < M} a_k^{(i)} e^{\mathrm{i}k\omega t}, \\ a^{(i)} &= (a_k^{(i)})_{|k| < M} \quad i = 1, \cdots, p \quad M \in \mathbb{Z}. \end{split}$$

離散畳み込みはこれらの周期関数の積

$$u_1(t)\cdots u_p(t) = \sum_{|k| \le p(M-1)} (a^{(1)} * \cdots * a^{(p)})_k e^{ik\omega t}$$

を表す事になる。ここで

$$(a^{(1)} * \cdots * a^{(p)})_k = \sum_{\substack{k_1 + \cdots + k_p = k, \\ |k| \le p(M-1), \\ |k_1| \cdots |k_p| < M}} a_{k_1}^{(1)} \cdots a_{k_p}^{(p)}$$

と表される。

1.3.1 畳み込みの定理

畳み込みを離散フーリエ変換したものは、それぞれのフーリエ係数の離散フーリエ変換の積になる。

$$\mathcal{F}(a^{(1)} * \cdots * a^{(p)}) = \mathcal{F}(a^{(1)}) \hat{*} \cdots \hat{*} \mathcal{F}(a^{(p)})$$
$$= b^{(1)} \hat{*} \cdots \hat{*} b^{(p)}.$$

ここで $b^{(1)}$ $\hat{*}$ \cdots $\hat{*}$ $b^{(p)}$ におけるベクトル同士の積は、要素毎の積を表す。

1.3.2 離散フーリエ変換を使った畳み込みの計算方 法 (FFT アルゴリズム)

実際の畳み込みの計算方法について説明する。 周期 L、変数 t の周期関数 $u_i(t)$ が有限項のフーリ エ級数

$$u_i(t) = \sum_{|k| < M} a_k^{(i)} e^{ik\omega t}, \quad a^{(i)} = (a_k^{(i)})_{|k| < M}$$

で表されているとする。ここで $\omega = \frac{2\pi}{L}$ とする。こ のとき、p 個の関数の積

$$u_1(t)\cdots u_p(t) = \sum_{|k| < p(M-1)} c_k e^{ik\omega t}$$

を表現するフーリエ係数 $(c_k)_{|k| \leq p(M-1)}$ を以下の計算方法により求める。

入力: $a^{(i)} = (a_k^{(i)})_{|k| < M} \in \mathbb{C}^{2M-1}$ $(i=1,\cdots,p)$ step1: エイリアシングエラーを防ぐために、入力された値 $a^{(i)}$ の両脇に (p-1)M 個の 0 を付け加える。これを $\tilde{a}^{(i)}$ と書く。

$$\tilde{a}^{(i)} = (\underbrace{0, \cdots, 0}_{(p-1)M}, \underbrace{a^{(i)}_{-M+1}, \cdots, a^{(i)}_{M-1}}_{2M-1}, \underbrace{0, \cdots, 0}_{(p-1)M}) \in \mathbb{C}^{2pM-1}$$

step2: step1 で得た値 $\tilde{a}^{(i)}$ に対して逆離散フーリエ変換を行う。変換した後の値を $\tilde{b}^{(i)}$ と置く。

$$\tilde{b}^{(i)} = \mathcal{F}^{-1}(\tilde{a}^{(i)}) \in \mathbb{C}^{2pM-1}$$

step 3: $(\tilde{b}^{(1)} \hat{*} \cdots \hat{*} \tilde{b}^{(p)})$ を計算する。上記の畳み込みの定理と同じく、このベクトル同士の積は、要素毎の積を表す。

$$(\tilde{b}^{(1)}\hat{*}\cdots\hat{*}\tilde{b}^{(p)})_j = \tilde{b}_j^{(1)}\cdots\tilde{b}_j^{(p)}, \quad j = 0, \cdots, 2pM - 2$$

step4: step3 で求めた $(\tilde{b}^{(1)} \hat{*} \cdots \hat{*} \tilde{b}^{(p)})$ に対して、離散フーリエ変換を行い、得た値を 2pM-1 で割る。

$$c_k = \frac{1}{2pM - 1} \mathcal{F}_k(\tilde{b}^{(i)} \tilde{*} \cdots \tilde{*} \tilde{b}^{(p)}) \quad |k| \le p(M - 1)$$

求めた c_k のうち、実際に必要なのは両脇の p-1 個を取り除いた $|k| \leq p(M-1)$ 個である。

$$c = (\underbrace{0, \cdots, 0}_{(p-1)M}, \underbrace{a_{-M+1}^{(i)}, \cdots, a_{M-1}^{(i)}}_{2M-1}, \underbrace{0, \cdots, 0}_{(p-1)M}) \in \mathbb{C}^{2pM-1}$$

出力: $c = (c_k)_{|k| < p(M-1)} \in \mathbb{C}^{2p(M-1)+1}$

下記のコードが離散畳み込みを実装した関数になる。 また、本論文に記載されているコードは、2 段組の都 合上、適宜改行されている。

 $function\ powerconvfourier(a::Vector\{Complex\{T\}\}$

,p) where T

M = Int((length(a)+1)/2)

N = (p-1)*M

1. Padding zeros: size(ta) = 2pM-1
ta = [zeros(N,1);a;zeros(N,1)]

```
tb = ifft(ifftshift(ta))
tb^p = tb.^p # 3. tb*^tb
c^p = fftshift(fft(tb^p))*(2.0*p*M-1)^(p-1)

# return (truncated, full) version
return c^p[N+1:end-N], c^p[p:end-(p-1)]
```

end

1.4 離散畳み込みの精度保証付き数値計算

これから、離散畳み込みの精度保証を行う。離散畳み込みのアルゴリズムには、FFTが含まれるため、まず、FFTの精度保証を行うための関数を定義する。コードについては付録に記載する。

verifyfft は、要素数が2のべき乗の場合しか実行できないので、step1の padding の部分で要素数を調整する。

$$\tilde{a} = (\underbrace{0, \cdots, 0}_{L \text{ (ii)}}, \underbrace{0, \cdots, 0}_{N = (p-1)M} \underbrace{0, \cdots, 0}_{M \text{ (iii)}}, \underbrace{a_{-M+1}, \cdots, a_{M-1}}_{2M-1}, \underbrace{0, \cdots, 0}_{N \text{ (iii)}}, \underbrace{0, \cdots, 0}_{L-1 \text{ (iii)}}) \in \mathbb{C}^{2pM-2+2L}$$

$$c = (\underbrace{0, \cdots, 0}_{L \text{ (m)}}, \underbrace{0, \cdots, 0}_{(p-1) \text{ (m)}}, \underbrace{a_{-p(M-1)}, \cdots, a_{p(M-1)}}_{2p(M-1)+1 \text{ (m)}}, \underbrace{0, \cdots, 0}_{(p-1) \text{ (m)}}, \underbrace{0, \cdots, 0}_{L-1 \text{ (m)}}) \in \mathbb{C}^{2pM-2+2L}$$

下記のコードは、区間演算とベクトル、両方の型に 対応できるように、多重ディスパッチを利用する離散 畳み込みの関数である。